私が通った幼稚園・保育園(1)

私の保育園時代

榎沢　良彦

私が保育園に通ったのは、四十五年も前のことです。現在とは、子どもたちの生活も地域の状況もかなり違っていた時代です。その頃、幼かった私はどのような生活をし、その生活に何を感じていたのか、おぼろげな記憶をたどって、思いだしたいと思います。仕事に追われる日常の中で、幼い時代にタイムスリップすることは、非日常の世界が現れるようで、少し心が躍る出来事です。

私の育った環境

私は千葉県君津郡（現在の君津市）の農村部で生まれ、そこで幼児期を過ごしました。家は農家でしたから、農作業についていっては邪魔をしながら遊びました。農家には納屋があり、そこは子どもにとっては格好の遊び場所で、近所の小学生たちと隠れん坊をしたりして遊びました。よく、裏山にも登ったものです。ですから、友だちと自然が私の遊び相手でした。

農家は今でもそういう家が多いでしょうが、私の家は大家族でした。両親と妹の他に、祖父母、曽祖母、叔父叔母が一緒に暮らしていました。日中は、主に曾祖母が私の面倒を見てくれていたようです。

そういう家庭ですから、私は特に保育に欠けていたわけではありませんし、近所に友だちもたくさんいましたから、保育園に通う必要はありませんでした。しかし、両親には、小学校に入る前に集団生活を経験させたいという考えがあったようで、一年間保育園に通うことになりました。

保育園への行き帰り

農村部ですから、当時、幼稚園はありませんでした。私は家から三キロほどのところにある公立の保育園に通いました。

朝は、近所の小学生の友だちと歩いていきました。ときには父や叔父が出勤途中、オートバイで私を送ってくれることもありました。当然、道路は今のようにアスファルトではありません。砂利や土の田舎道を通ったのです。冬は、霜柱を踏みながら歩くのが面白かったことを覚えています。

降園時には、友だちと連れだって帰りました。帰り道は朝とは違う世界を見せてくれます。先を急ぐ必要はないので、道草を食いながら帰りました。シロツメ草を摘んだり、レンゲ草の絨毯の上で相撲を取ったりしました。小川に入って遊んだこともあります。

このように、当時は、幼児であってもかなりの距離を歩いて通園していました。それは決して苦しいことではなく、いろいろな発見をもたらしてくれる楽しいことでした。

保育園の思い出

ここまで述べてきたように、私は自然の中で幼児期を過ごしました。保育園の行き帰りにも、自然を相手に遊んだのでした。自然は私に大人の日常世界とは異なる、その意味では非日常の遊びの世界を経験させてくれたのです。保育園は自然界とは違う、人工的に用意された物的な環境ですが、私に魅力的な遊びの世界をもたらしてくれました。私が保育園の生活でよく覚えているのは、次の二つの出来事です。

(一)物置の世界

保育園では、私は腕白だったようです。仲のよい男児が一人おり、よくその子と一緒に行動していました。二人とも腕白だったために、担任の先生を随分困らせました。

当時、私の通った園では、年長児たちは保育者と一緒に部屋の掃除をしていたと思います。幼児のことですから、掃除を仕事として自覚するのは難しく、ついつい遊びだしてしまいます。よく、私たち二人はほうきでチャンバラごっこをしました。そのたびに先生に叱られていました。

ある時、よほど私たちの「ふざけ」が目に余ったのだと思いますが、先生に叱られ、反省させられるために、物置に入れられました。当然、叱られた私たちはおとなしくなりました。ところがそれもわずかの間で、私たちは物置の中で遊びだしたのです。

物置の中というのは、子どもたちが普段あまり目にすることのない場所です。したがって、そこは子どもにとっては未知の場所であり、それ故に、そこにあるあらゆるものが注意を引き付けるのです。私たち二人は、すっかり反省することを忘れ、物置の中で遊びだしたのです。腕白の男児にとっては、これ以上望めないくらい楽しい場所を与えてもらったのです。様子を見に来られた先生は、反省するどころか、夢中になって遊んでいる二人を見て呆れたそうです。

(二)幻灯を見る

現在はあまり使われないと思いますが、当時はよく幻灯（スライド）が保育の中で利用されていました。これが唯一の視聴覚機器だったと思いますが、子どもたちはみんなこれを楽しみにしていました。私もこの幻灯を非常に楽しみにしていました。

幻灯のどこが好きだったのかというと、実は、私は幻灯そのものよりも、幻灯を見るために部屋が暗くされるのが好きだったのです。幻灯の時間になると、窓に暗幕が引かれ、普段明るい保育室が、たちまち暗い部屋に変わるのです。部屋が暗くなるというだけで、私はうきうきした気分になりました。

これと同じ経験を私は小学生の時に何度もしました。それは、台風が来たときです。今は雨戸のない家がほとんどですが、私が子どものころには、どの家にも雨戸がありました。台風が来ると、昼間でも雨戸を閉めて備えたのです。幻灯の時と同様に、このときも、明るい部屋が瞬く間に暗い部屋に変わってしまうのです。真っ暗になった部屋の中で、よく懐中電灯を点けて、お化けごっこをして遊びました。

このように、暗い部屋は子どもにとって特別なものではないでしょうか。恐らく、自分一人だけでは、暗い部屋で遊ぶ気にはならないでしょう。友だちや兄弟がいることにより、暗い部屋が魅力的な空間として経験されるのでしょう。私にとって幻灯は、魅力的な暗い空間を生み出してくれる機械だったのです。

幼児の体験世界

右記に上げた保育園での思い出を基に、幼児の体験世界はどうなっているのか考えてみたいと思います。まず、物置という空間のもつ意味を考えましょう。

物置の中は普段目にしないだけに、子どもの興味を引きやすいといえます。しかし、叱られて意気消沈している私たちが遊びだしたのは、それだけが切っ掛けではないように思われます。

物置は壁によって囲まれた空間であり、普段子どもたちが生活している空間と区別されています。子どもたちがいつも生活している空間を、「日常の生活空間」とすると、物置は、子どもが自由には出入りできないという点で「非日常の空間」と言えます。つまり、友だちと私は日常の生活空間から非日常の空間に入り込んだのです。いわば質的に異なる空間に入ったのです。

空間の質が変わるということは、世界が変わることと同じです。そして、それぞれの人が生きる世界の様相は、その人の関心や生き方、態度、意識のありようなどと常に連動しています。したがって、人がある世界から別の世界に入ると、その人の態度・生き方などが変化します。例えば、仕事や労働の世界から遊びの世界に入っ

たとき、私たちの態度や意識は一変します。

これと全く同じことが友だちと私に起きたのです。物置という、日常の生活空間とは質的に異なる空間に入ったことで、私たちの意識が一変したのです。つまり、日常の生活空間で起きた出来事（先生に叱られたこと）は日常の生活空間と共に、私たちの脳裏から消え失せたのです。そういう意味で、物置は子どもに日常の世界とは違う別の世界をもたらすと言えるでしょう。

では、幻灯が行われた部屋はどうでしょうか。部屋が暗くされることは、子どもが物置に入ることと全く同じ経験を生じさせます。物置に入る場合は、私たちが物理的に空間を移動することで別の世界に入っています。幻灯を見る場合は、一つの空間が「明」から「暗」へと変化することで、私たちは別の世界に入っています。別の世界への入り方は異なるものの、私たちが世界の変化を経験している点では同じなのです。

実際に、部屋が暗くなることで、空間の相貌は一変します。明るい空間では、そこに存在しているいろいろなものが明確に区別でき、見ることができます。一方、暗い空間では存在するものの境界は消滅し、明確にものを見ることができなくなります。その結果、何か非日常的なことが起きそうな予感をもたらします。そして、子どもはその予感から少し高揚した気分になります。子どもの気分が変化したことは、まさしく世界の変化を経験したことに他なりません。

このように、幻灯は、それを見るために部屋を暗くすることで、子どもたちを別の世界に連れ込むのです。それが子どもにとって魅力なのではないでしょうか。

こうして考えてみると、幼児は世界が変化するような出来事に引きつけられるのではないかと思われます。先に、保育園の帰りに道草を食って遊んだことを述べました。幼児は容易に遊びだします。音楽や物語の世界にも容易に入り込みます。これらは日常の仕事の世界とは異質な世界です。生来的に、幼児には、容易にいろいろな世界に入り込む能力があるように思われます。

（淑徳大学）